

『絶対に他の人に負けたくない。  
その強い気持ちがあったから、今があると思います』

竹中 健次 (フラワーデザイナー)  
Takenaka Kenji

シンプルかつゴージャス。  
この相反する二つを  
両立させるのが僕の“色”



フラワーデザイナーとして、アメリカはニューヨークを拠点に活躍する竹中健次氏。シンプルかつ、ゴージャスなフラワーデザインで「花の詩人」と称される竹中氏は、何をきっかけに、花の世界の扉を開けたのでしょうか。いつもは言葉でなく、花で表現する竹中氏。その内に秘められた熱い気持ちを聞きました。

#### Profile

1974年大阪府生まれ。日本国内でフラワーデザインを修得後、2009年からNYに拠点を移し活動。「花の詩人」と賞賛された者が作り出すフラワーデザインは“花の彫刻”としてNYで絶賛され、カーネギーホールでの“Season Opening Night Gala Concert”の装飾を日本人で初めて指名される。国連アンバサダーボールでの装飾を行ったり、メイシーズデパートのフラワーショーにおいては、“アメリカのトップ・フローラル・デザイナー”の6名の一人にも5年連続選出される。ニューヨークでの活躍が高く評価され、現地メディアでも大きく取り上げられており、近年ではジョージ・ジェンセン、フレグなどのジュエリーブランドや、バカラホテル&レジデンスニューヨークといったラグジュアリーホテルとの専属契約を行い、また、2016年3月東京・銀座に自身初のブランド“SIKIRO NEW YORK”を立ち上げ、活躍の場を一層広げている。

※肩書などは、インタビュー当時(2017年9月)のものです。

## 人生を決めた、白いチューリップ

小さい頃から花は身近な存在でした。実家が花のビジネス（株式会社竹中庭園緑化）をしていたんです。でも、自分で花を扱うようになったのは、ずっと後、20歳頃です。きっかけは、学生時代にアルバイトを始めたとき、歓迎会で生まれて初めて人から花をもらったことです。白いチューリップがジュート（黄麻）で包まれている花束で、すごく感動して。そのシンプルな花束も、人に花をプレゼントするという行為も、とてもカッコ良く感じ、これを仕事にしようとその時に決めました。

正直言うと、就職活動をしたくないという気持ちもありましたが、始めてみたら、



花で表現するというのが自分に向いていて、すっかり魅せられてしまいました。これは今もですが、改まってアレンジメントのデザインを考えるとというよりは、なんとなく自然と手が動いてしまうんです。

ニューヨークでフラワーデザイナーとしての活動を始めたのは2009年からです。学生の頃から何度か来たことがあったからか、街の雰囲気が好きで、渡米を決めてしまいました。英語は、中学生の頃から独学で勉強していたんです。というか、英語オタクだった。親戚のお姉さんがアメリカの人と結婚して、うちに遊びに来たことがあったのですが、まったく話せなかつたんです。それが悔しくて、字幕を隠して洋画を繰り返し観たりして、猛勉強しましたね。

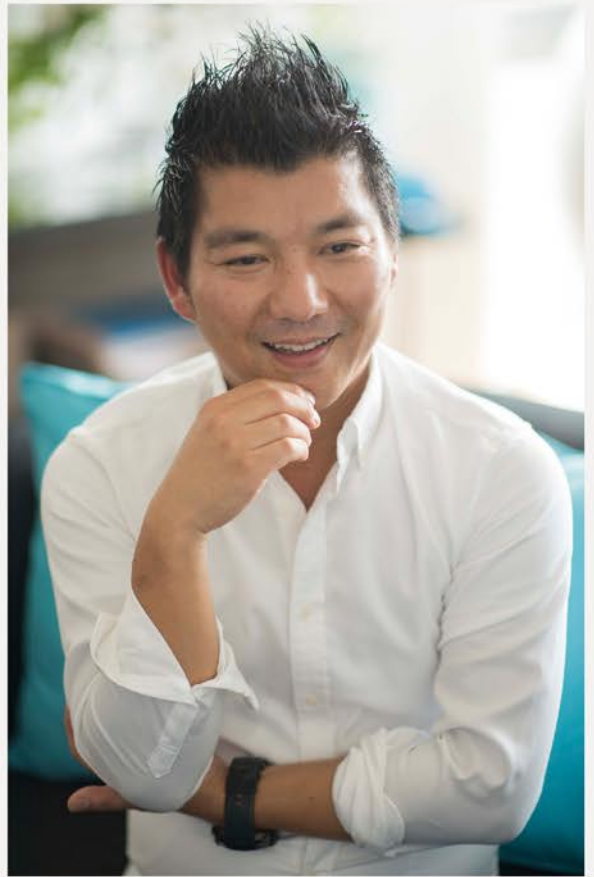
## 今も自ら水やりに行く、職人気質

ニューヨークは、日本よりも、よりパーソナルなつながりを大切にして、仕事が進む気がします。今、クリスタルガラスでその名を知られるバカラと、スターウッドグループが提携したラグジュアリー



ホテル「バカラホテル&レジデンスニューヨーク」のロビー装飾を担当させてもらっていますが、この仕事も人とのつながりが発端でした。

2009年に、音楽の殿堂、カーネギーホール「Season Opening Night Gala Concert」の装飾を務めたのですが、カーネギーホールの紹介で、あるホテルの装飾を手がけたんです。その後、その時のホテル担当者がバカラホ



テルに転職されて、僕の世界観を気に入ってくれていたのか、声をかけてくれたんです。すでに他のフラワーデザイナーに決まっていたのですが、改めて、オープニング前のバカラホテルを舞台に、プレゼンテーションをして決めることになりました。候補だった3者で実際にロビーに花を生けるんです。

展示期間は2週間で、3者交代でプレゼンに臨みました。僕は口下手で、営業は苦手です。ただ、その代り職人気質というか…。花を生けた後も2週間、ほぼ毎日通って、チェックして、メンテナンスしていたら、「そこまでやる人は他にいないよ」と言われて僕に決まりました。自分としては、ごく当

が済まない性質なんです。日々、その積み重ねです。

### ニューヨークでの活躍を支える、和の心

ニューヨークで活動し始めてから、もうすぐ10年。忘れたくても忘れられない失敗は、2016年のある結婚式のことです。つくったブーケが新婦のイメージと違ったみたいで、みんなの前で「何だこれは！」と新婦に怒鳴られたんです。こちらとしては、予算以上のパフォーマンスをしていたのですが、激昂されてしまい、半泣き状態になりました。結婚式当日のことでしたからね。結局、予備として持っていた花も全

たり前のことをやっただけです。でもそのおかげで、花を想う気持ちと熱意が伝わって、うれしかったですね。仕事が増えた今でも、自分メンテナンスに行ったり、水やりに行ったりすることもしょっちゅうです。自分でやらないと気

部使って、誠心誠意対応して、なんとか最後は満足してもらえました。今でも、あの時のことは忘れません。

でも、そういう経験も経て、今、一つずつ夢が叶っていているのを実感しています。小さかった夢が少しずつ大きくなっているのを感じているところです。アメリカの他の州にも出てみたいし、グラミー賞み



たいな大きなパーティーも手がけてみたい  
です。ただ、体は一つなので、どうやって  
その夢を実現する  
かがこれからの課  
題ですね。

あえて僕が手が  
ける花のスタイル  
を説明するなら、  
シンプルかつ、  
ゴージャス。相反  
することのように  
思われるかもしれ  
ませんが、この二  
つを両立させるの  
が、僕の”色”かも  
しれません。あと、  
和の心。お客様に  
も花にもきちん  
と向き合いたいとい  
うか、心をこめた  
いというか……。だ  
から、花にはいつ  
も正対して生けて  
います。決して斜  
めを向いて生けた  
りしません。

僕はたぶん職人



気質で、それと負けず嫌いなんです。あま  
り外に出しては見せないけれど、絶対に他  
の人に負けたくない。その強い気持ち  
があったから、今があると思います。



## 杉山 大輔 Daisuke Sugiyama

### Profile

「私の哲学」編集長 | ビジネスプロデューサー  
株式会社インターリテラシー 代表取締役

1979年東京都生まれ、ニューヨーク育ち。慶應義塾大学総合政策学部卒業。慶應義塾大学大学院経営管理研究科修了(MBA取得)。1999年に教育コンサルティング会社を立ち上げ、2007年コミュニケーション問題の解決をはかる株式会社インターリテラシーを設立。3男1女、4人の子供の父親。

『脱米論』(財)公共政策調査会主催、読売新聞社後援「21世紀においてあるべきわが国のかたち」をいかに考えるか」優秀賞受賞。『守破離』日本貿易会主催「ジャパンブランドの可能性」第2回日本貿易会賞優秀賞受賞。著書に『行動する勇氣』(フォレスト出版)、『運を動かせ』(ディスカヴァー・トゥエンティワン)がある

NOIR hanna International(NYC)にて  
ライター:夏目みゆ 撮影:Sebastian Taguchi

